
心に吹く風

イレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心に吹く風

【Nコード】

N1364B

【作者名】

イレ

【あらすじ】

1人の少年と1人の男の物語。心を探すお話。

穴あき玩具R 1

”良かった”目が覚めて、いや意識が戻って一番にそう思う。

暗闇に光が灯りだすように。無だったものが有になるように。

それだけのことなのにホッとする。

それだけのことなのにだ。

俺は、弱虫なのかもしれない。

太陽光が痛いくらい目に差し込んでくる。

いかにも「朝だぞ」っと言わんばかりに降り注ぐ。

体はまだ主格が宿らないためか、動かない。

目は、青のカーテンの掛かった窓にポツンと置かれた

小さなサボテンを捕らえて動かない。

いつから俺は、生きることを始めたのだろう。

青のカーテンが開いている。

きつとそのせいで、太陽光が侵入したんだと気づく。

この世は、分からない事だらけだ。

知ってることより、知らないことの方が多い。

およそ、3対7つと言ったところだろうか。

俺は、いつから朝をお覚えたのだろう。

ハハハこれじゃきりがないや。

「お・・・よう。・・・おはよう。」

我に返る。

無表情の俺に、彼が4文字の言葉を布団のように優しくかけてくれていた。

それをきっかけに、体も目もやっとちゃんと目覚めた。

やっとデータの読み込みが完了したようだ。

嘘つき製作者 1

「今の人生楽しんでますか？ YES・NO」

勿論、NOの方に二重も三重も丸をつけた。

人が行きかう中、うごめく生き物を避けていた私だったが、街を歩いているとき出会ってしまったちよつとしたアンケートだった。

アンケート用紙をいくつも持った、20歳ぐらいだろうか。

いやもっと若いかもしれない。

そんな若いお姉さんに呼び止められ、人良くペンを走らせているままで。

何のアンケートなのだろうか。

その他に、「生きがいだと思うことは？」

「死に対する恐怖がありますか？」

など、他にも人生に関する質問が続いていた。

人生が楽しくない理由、そんなの考えた事もなかった。

正確には、考えたくもなかった。

人付き合いが下手なわけではない。

むしろ得意な方だ。

だからと言って、そこに楽しさがあるか？と言うとそうでもない。

強いて・・・強いていうのなら、あの日から

あの日をきっかけに私の人生は・・・変わってしまった。

あの日以前の私はきつとあのアンケートにちよつと微笑んでYES
に丸を

付けていたことだろう。

いつの間にか、人が4ゝ5人しかない狭い通りに出ていた。

本を読んでいる人、先を急いでいる人、左手に風船、右手にお母さ
んの手をとった子供。

10分前とは全く違う時間が流れている。

あの日を理由に、現実逃避している訳じゃない。

あの日のせいにし、自分を悲劇のヒロインに仕立て上げてる訳じゃ
ない。

違うんだ、そうだ私が勝手に自分だけが不幸だと思っているだけな
んだ・・・。

忘れていた記憶と、蓋をしていた忌まわしい憎悪が溢れ出しそうになるのを

必死でこらえた。

爪の後が付き、血がにじみ出る寸前ぐらい手を握り締めて。

今生きていること。

それは、私に与えられた何らかの幸せ。

そう思い続けないと、今ここに立っていることさえないだろう。

「今の人生楽しんでますか？ですか・・・」

アンケートを終えて、10分前のようにうごめく生き物を避けることなく、

気づかないうちに言葉を漏らしていたようだ。

これぞ独り言。

言葉を発したと同時に、ある思いもよらない考えも一緒に出てきた。

楽しくなければ造ればいい。促されるように走った。

いつの間にかひとけは全くなくなっていた。景色が動いている。

途中まだ明かりがかった空に白く丸いモノが見えたので何となく手

を伸ばしてみる。

「ハアツ。ハア・・・」

息がまた切れてきてちよつと苦しくなってきた。

時計を見ると一時間以上が経っていた。どうやら、時間と共に走っていたらしい。

辺りは緑が見当らない。灰色の塀に隔離されているような薄暗い通りに出ていた。

闇が漂うのは18時30分になる時間帯だからだろう。

いつから面倒くさがりやになったのだろう。簡単なことだった。造ればいい。

私はまた、走った。とにかく走った。頭では分かっている、上手く表現出来ないように

ただ走っているという行動に、もどかしさを覚えた。

完全に闇が空を支配した。さっきより明らかに、光を取り戻した丸い月が見えた。

灰色の通りは、もはや真っ黒なトンネル状態。

そのトンネルに入り口の様なひとときわ目に付く看板があった。

呼ばれているような奇妙な感覚を背負い、考える間もなく足はすで

に動いていた。

私はこの店に来るためにずっと、ずっと走っていたんだと勝手に解釈。

「ゴッホッ。・・・ゴッホ。」

適度な息切れを通りこし、とっても苦しい。今はそんなことどうでもいい。

今時珍しい横にスライドさせて開ける戸。よく見ると、看板の周りのイルミネーションの

電球は所々切れていて、たいして明るくもなかった。月の方が何倍も眩しい。

戸に手をかけ右にずらす、思ったより滑りがよく戸は「ガラガラ」と音を立てた。

嘘つき製作者

息は私の意志を聞いてはくれず、まだ暴れている。

「コッツ」

靴と地面との間に、何らかの会話が生まれた。

「オモチャ屋」と看板を掲げた、古びた店に足を踏み入れる。

外のトンネルのような暗さと、中の神々しい明るさのギャップに驚く。

暗闇に目が慣れていたせいか、急な光に耐用できない目は細めるところとしか他ならない。

徐々に細められた目を開いてみる。店内は思ったより広く、木材で作られた馬、クマのぬいぐ

み、赤いラジコンカーなど沢山あって、これでもかというほどの数のあらゆるオモチャが

並んでいた。

どれも、いつ動き出してもおかしくないような、そんな命を持っている物のように感じて

ならなかった。

「今晚は。」

突然な声に不意を突かれる。驚いて心臓がドッキッと聞こえた気がした。

オモチャ館に普通の人間の声がしたのだから。

店なのだから、経営者がいるのがごく当たり前だが、この店に限っては二足歩行のロボットが

でてきても不思議でもなんでもない。

奥から私を驚かせた、萎れかすれた声の主がすうつと現れた。

背は低めで、白髪に白ひげ。冬にあの赤いコスツチュームを着せると間違いなく

子供が寄ってきて「サンタ、サンタ。」と指さして、プレゼントをねだるだろう。

「何をお探しですか？」

左の胸が激しく脈打つ。

「その・・・私、何かオモチャが欲しくてですね・・・。そうですね、変な話ですけど、

私の人生を楽しくさせてくれるような、そんなとびっきりのオモチャを探しています。」

並んだ古い人形や飛行機のプラモデル、その中でも特に誇りの臭いが気になって仕方ない。

1分程沈黙が続いた。私にはその60秒という時間が、長く苦しいものを感じた。

きつとその間、私自身の時計が止まって息をしていなかったためだろう。

「それじゃあこれはそうですか。」

口元に笑みを浮かべた老人が人差し指を震わしながらゆっくりと指した方を見る。

「組み立てると、あなたを楽しませてくれるであろうオモチャがきつとできますよ。」

なあに簡単な事じゃよ。あなたの思いがありや簡単に作れるとも・
・。。」

そこには、人間の形をした物体があった。大きさは小学生くらいの背丈で、丸と4つの

・・・・手足だろうか、そこでかろうじて人間をイメージしたものなのだろうと分かった。

色もなく、真っ白な塊のそいつは、”のっぺら”という言葉で尽きる。

私は静かに頷いた。恐怖のためか、緊張のためか、体全体が震えて

いる。

嬉しかったのかもしれない。

「あのオモチやいただきます。」

今の私が出せる精一杯の言葉だった。

造る人

辺りに木が入り組んだ家に帰るなり、早速楽しさをくれるであろう買ったばかりのオモチャ

を取り出す。期待の波が押し寄せてくるたびにワクワクする。

幼少にかえった気分だ。

「ん?？」

のっぺらの、体の一部に小窓があり、開くと中に赤や青、紫、黒などの色とりどりの無数の

回線が広がっていた。本格的な作りにより一層胸高鳴る。

今まで全く気が付かなかったが、丸の部分、人と言えば頭部の部分の上10センチあたりが

蓋のようになっていて開くことに気付いた。

蓋を取って開けてみる。丸がパツカッと三日月に分かれた。その中には先ほどと同様、無数の

回線。

「えっつ。」

モニター!?!液晶画面?!?なにやら分からないけど、凄いもの

入っていた。

「まだ何か・・・なんでしょう？」

紙・・・説明書らしきものが入っていた。

「何々、この商品はあなたによって作り出すことの出来る世界でたった一つのオモチャで

す。」

大げさな。

「1、データチップを内蔵して下さい。」

「2、あなたの血をパーツ4にメモリいっぱい注いで下さい。」

「3、想いをパーツ5に注いで下さい。」

「4、充電はこまめに行って下さい。」

と、書いてあった。

・・・とりあえずは、足の裏についていた縦横3センチ程のチップを内蔵し、包丁で

人差し指を軽く切り、出てきた赤い鉄の臭いを4滴ほどパーツ4に注ぐ。

パーツ5を握り締めて、約30分もの間、想いをめぐらせた。

果たして想いは注がれているのか、それは私には分るはずがない。

それぞれを所定の位置にセットし、一応完成となった。

気が付けば、朝の5時をまわっている。一応完成となったのっぺらは、容姿は変わっては

いなく、音が鳴るわけでも、手を振る素振りさえも見せなかった。

あの、いかにもらしい回線はただの飾りだったのだろう。

「ハハハ。」

1→5を忠実に行ったことが馬鹿らしくなってきた。でも、時間を忘れて熱中してなにかを

するなんて事、何年ぶりだろうか。楽しかった……。そう思えてのっぺらを作っていた時

間が確かにあった。それだけでも、良かったのかもしれない。元々なにが出来るか分からなか

ったのだから。もしかしたら本当は、何も完成などなくのっぺらのままであってあれが

完成だったのかもしれない。

いや、もしかしたら想いが足りなかったのかもしれない。はたまた、血が足りなかったのか

・・・・・・・・・・・・・・・・

「んっっ。」

ハッと目が開く。ごくごく自然に、疲れも眠気も、なんの前触れもなく、

いつの間にか眠ってしまっていた。気が付かなかった。

今、何時なのだろうか、東側の壁にかかったシンプルなシルバー色の時計に目をやる。

この、素朴などこもかざりつけのない時計のデザインが気に入っている。

「ええっ。もう6時30分ですか・・・。」

作業を終えて約23時間もの間、体を休めていたらしい。

そりゃ無理もない。あんなに走ったのは、高校生の校内マラソン大会以来。

しかも30代の私・・・オジサンと言うべきか、にはそうとう応える。

そろそろ動きださなければ、このまま此処に留まりそのまま意識がなくなるまでボーっとし

私という魂が抜け、抜け殻状態になってしまいそうな気がする。それを恐れて、

体を起こそうと決意。その意思是余りないのだが、体を起こす。

「よいしょと。・・・痛っつ。」

どうやら両足筋肉痛のいやなオマケが付いてきたみたいだ。

ああ、そうだ。記憶から早くも取り除かれてしまいそうになっていたが、あのロボット

は・・・痛いと軋む体を起こす。

「ううわっつ。」

体の中の巨大な魚が驚いて水を切って飛び跳ね上がった。その拍子に体は後ろに飛ばされてし

りもちをついてしまった。

錆びたバネによって普段の動きを強いられないはずの筋肉は、自分が思っていた以上に

敏感な動きが出来る事が分かった。

「どっど・・・どどど泥棒！」

口にしたものの、薄々違うという気はしていた。なぜなら、小学生くらいの年齢をまとった

子供が、私が振り返ったその先で寝息も立てずに座った状態で寝ていたのだから。

もしかしたら、おとぎ話に出てくるようなこの家を魔女の館だと間違えたのかもしれない。

もしくは、窓から青いカーテンをすり抜け覗いた先にある異物な白い塊に誘われて来たの

かも知れない。ただの、かわいい不法侵入者だろうか。

巨大な魚が飛び出してきた時、気づいたのだがあの驚きはまた別のところにあった。

恐ろしさだろうとも、憎悪だろうとも、どちらにしろ全身のあらゆる毛という毛が逆立ち立っ

ていることは、事実だ。

その子は、その小学生くらいの男の子に私は、とても見覚えがあった。

「おおおおお起きなさい」

恐怖を背にし、好奇心を盾に近づいてみる。

この状況に対応しきれないので、パニックった私には声を、手を、からだ全体を震わせながら

その子を揺ることしか出来なかった。

何度も声をかけても、左右上下に揺すっても、起きないし反応がない。

ましてや、呼吸の音も、心臓の音もなかったのだ。

「ん??」

後ろ首になにやらON・OFFと書かれたスイッチだろうか、ボタンらしきものがあつた。

汗ばむ手を上手に誘導してそのボタンを、おそろおそろ押してみる。

「パチッ」

電気をつける時に押すあのスイッチの音とソックリな音だ。

同時にその子の目が開いた。緑色の吸い込まれるようななんとも美しい目をしている。

再び、呼吸の仕方を思い出したのか、動きだした。

「おはよう。・・・おはよう。」

彼は、声がする方、製作者に目を向ける。私は彼と目が合った。

初めに手に取ったのは、薄汚い製作者の手だった。

私は、何故か泣いてた。別に弱虫でも、涙もろいのも、涙腺が緩んでいる訳でもない。

奇妙な衝動に駆られた。彼は、余りに人間に似たいた。

こうして誰かに手を取って欲しかったのかもしれない。

でも、小さなその手に温度は感じられなかった。

歯を食いしばる。

それにしても、彼は幼いころの私にソックリだ。

あののっぺらが、息を得たのだ。

「この商品はあなたによって作り出すことの出来る世界でたった一つのオモチャです。」

説明書に書かれたあの言葉の意味が分かった気がした。

造られるもの

「行ってくるからな。」

ほぼ毎日この台詞を発している。

「行つてらっしゃい。」

彼もよく呆ないものだ。

目が覚めて1時間後のささいな言葉のキャッチボール。行く場所は決まっている。

あいつに連れられ、生まれて初めて景色を見た時だった。

深緑の海に飲み込まれ這い上がってなお、浅緑の中を漂う。

俺の中の何かは、あの自然の壮大な景色に捕らわれてしまっていた。

一瞬にしてあの緑の世界に溶け出してしまっていた。

それからというもの、訳なしに通い続けるようになっていた。あの丘に。

家からわりと近かいし暇な俺には最も都合が良かった。

「ミャー」すぐ隣から耳に触る声があった。

またすぐそばでは、木の葉が擦れ合って音を奏でている。

予想とは正反対だった。

黒い子猫が早速と泣きながら駆けていた。親とはぐれて必死になっている様子だった。

声だけで絶対「白」だろうと思っていたのに。

ああそういえば、3日前にも黒猫をみたな。3日前の奴は、

さっきの奴みたいに威勢はよくなかった。

泣いている幼い少女がぐったりしたそいつを抱えて泣いていた。

それであいつは死んだのだと悟った。

森を出て街におりた時何回かすれ違ったことのあった全身黒いコートをもった奴だった。

俺は、彼女みたいに目から大粒の雫を流すことができなかった。いつもだ。

涙を流すそういった感情を持ち合わせていないようだ。

腕をカッターで間違えて切った時もそういった機能は持ち合わせていないというように、

赤い液体は一滴も落ちてはくれなかった。外見は同じ生き物なのに、そういう点からも明らかに俺は違っていた。

考えることは出来るし得意だが心がないらしい。感情がないのだ。

その証拠に左胸の内部には野球ボール程の穴が空いていると、生みの親が教えてくれた。

生みの親、つまり俺を作ってくれた制作者だ。手足は勿論、脳までも無数の線や回路、

モーターを宇宙の星の如く散りばめていったくせに肝心な心は：

「お前が自分で見つけなさい。」

とその言葉はIQが非凡なデータチップが内蔵されている俺でさえも、

理解できないほどだった。しばらく行った先で一、二と足を止める。

木々の間から青空が見えた。そこに住む者達には、意志もなくただただ無心に、

風に促され揺れている。その自然な行いの循環に優しさを感じる。

そのままその優しさに俺の全ては飲み込まれてしまった。

それから、そこに住む生き物を探したり、ひなたぼっこをしたり、

とあつという間に時間は過ぎていった。

草木は、緑に少し明度が低い色を足され、明暗でいう暗に近づきだ

した。

さらにプラス赤を塗りたくられ、また違ったキレイを見いだしていた。

そろそろ家へ帰ることにする。

あいつが言っていた「今日は早めに帰って来て下さいね。」

という言葉を思いだし、その言葉が引かなかったのでほどくためにも家へ帰るとする。

「ただいま。」

ドアを開け、最初に見たのは、「お帰りなさい」と言う、

あいつのとっても嬉しそうな顔一面の笑顔と、

テーブルに置かれてある苺がポツンとのっている一つの小さなケーキだった。

「うわっなんだこれ」

家の中の雰囲気が変わっていることに気がついた。

ほこりっぽいはずの室内には、総称してごちそうとよべる食べ物の面々が並んでいた。

今日はどうかやら俺の一歳の誕生日らしい。

本来の人間の子なら一歳のはずはないのだが理由はあいつは言うこととはなく

俺も聞かなかった。

あいつは、プレゼントと言ってくさみどり色の飛行機のプラモデルをくれた。

それは、あいつに連れられて街へ出かけた時、

ふと立ち寄った玩具屋さんで俺が見ていたものだった。

プレゼンなんてくれなくてもいいのに…。

わざわざそこまでする彼の行動が分からなかった。

……………

貧乏なくせに。

欲しかった玩具を手にした喜びと、

あいつを労る両方の狭間で俺は、複雑な思考を並べていた。

ひみつ

忘れもしないこの11月12日。ライがうちにきて、いや、私に造られてちょうど一年が経ったのだ。

「ライ」私は彼にそう名前をつけた。

彼と目が合った時から、すぐに浮かんだ名前だった。

だが私は、一度も彼を、彼を目の前にし「ライ」と呼んだことがない。

つまり声としてその名を発したことがなく、心の中で私が勝手に呼んでいる名なのだ。

それは不思議でもなんでもなかった。私の心がきつとそうさせているのだろう。

花壇に出て花に水をやり、その後いつものようにライを見送る。

ほとんど一年このような生活が続いている。錆て痛々しいジョウロに水をくむ。

幸い穴は、あいていないがあと何年もつか分からない。

そのジョウロから、水が滑り落ちていく。

太陽が反射し綺麗な水の流れと錆をまとったジョウロとでは、

どうも似合わないものがあつた。花達は、朝一番の食事に満足そうに見える。

ドアがギギギイと開いて合図をした。私は、振り返る。

「いつもの所に行ってくるからな。」

急いでいるのか投げやりだ。ライの言葉と両足が同じスピードで駆けていった。

私が初めてライを外に連れていったあの場所、「草原の丘」にいくのだろう。

あの様子だとすっかり気にいっているようだ。

「分かりました。今日は早めに帰って来て下さいね。」

小さくなるライに手を振る。振り返ることもなく、

スタートしたペースを乱すことなく走っている。

はたして、私の声は届いたのだろうか。

さっきの続きで家のすぐ左隣にあるおおよそ縦横4メートル×5メートル程の花壇へ向かう。

白、黄色、ピンクの花を左手一杯になるだけ摘む。

花壇の上の辺りに位置する色とりどりの花に囲まれ、

ポツンとたたずむ大きな石の前にしゃがみ込む。

この大きな灰色の冷たい石を見るたびに、居た堪らない気持ちになる。

さっき摘んだ黄色のパンジーと白、ピンクの百合を備え両手を合わせる。

そして、石碑をあとにした。

そしてまた花を摘み今度はカゴに入るだけ花つめた。

フランスパンが3本入るくらいの木材のバスケットに。

それを持って森を下りてまちへ向かう。

1時間程歩いた頃、オシャレな服をおしゃれに着こなした住民達で賑わっていた。

赤と白のレンガ造りの家々が並んでいる。

道路沿いには、敷物を広げ靴、ナイフ、本などの雑貨を売っている店。

左隣は、野菜を売っている老婆の出店がある。私は雑貨屋の右隣に座ることにした。

ジョウロはいつ頃から錆たのだろう。

そんな、くだらない事を考えつつ、買い手が現れるのを売られていく花と共に待ち続ける。

ちょうど左隣の雑貨屋の古い本が売れていった。

彼はあまりに人間に似すぎている。

そのために、私は少々の不安を抱えていた。彼は、とても賢かった。自分がロボットだということも理解していた。知識も、学習力も私に劣らなかった。

私は彼が完成して3日目の朝嘘をついた。

「お前には、心がないのです。これ位の穴が開いていて、残念なことに、

気持ちを持つことが出来ず落っこちてまうのです。

もしお前がどうしても心が欲しいと言うのなら自分で探してきなさい。」

大嘘だった。あまりに、人間に似すぎている彼には心が確かにあった。

調べてみたら感情のデータも諸々インプットされていた。怖かった。気付いて欲しくなかった。悲しみや痛みを彼には知って欲しくなかった。

私のように彼がもし、悲しさを知ってしまった時は消去してしまえばいいと思っている。

摘んだ色とりどりの花が少し売れ残ってしまったが、家に帰った。

それから、1時間後「ただいま。」日がギリギリ沈まないまだ明るいころだった。

ギギギとドアが鳴った。ライが帰ってきたようだ。

「うわっなんだこれ。」

テーブル上のイチゴが載ったケーキに目が向けられていた。でもあれは、私が食べる文だ。

だって、ライには食事なんて勿論必要ない。外聞き悪いが、形だけ誕生日ということだ。

「今日はお前の誕生日パーティーです。1歳おめでとうございます。」

見た目は5歳だが年齢は1歳。矛盾しているがこれが事実、なんか笑える。

ケーキにろうそく一本たてて火を灯す、ろうそくは命が宿ったように火をちらつかす。

ライがフウッと息をはく。火は一瞬にして白い煙と匂いになって飛び立った。

プレゼントにくさみどりいろの飛行機をプレゼントした。

ライは「こんなのいらない。」と顔を横にそっぽを向いた。ライは素直じゃない。

前々から欲しがっていたくせに。

秘密

「ふう。よいしょ。」

草木が生い茂る緑の中に風が一つ吹いた。草は千も揺れた。

草原という言葉の真ん中にこの場所は位置している、そんな感覚さえ覚える。

俺はじゃあ今きつと草と原の間にいる。草の広がる絨毯にドサツと倒れる。

仰向けの大字で。雲が風に流され泳いでいるように動いていく。

目を閉じたい気分だ。さっきまで、ソラという名の友達がいた。

極普通の関係が俺とソラにはあったはず。

俺の大傷を負った腕が流すはずのものを流さず、

変わりに無数の回線が姿を現してしまったせいだろ。

「お前：怖いよ：に人間じゃねえ」 怯え、震え今までに聞いたこともない酷い声だった。

そう言うのも無理はない。だって人間ではないのだから。

ソラは、全力で精一杯逃げて行った。

その表情はまるで犯人に殺されようとする被害者のようだった。

背中が小さくなる。もう合うこともないだろ。バイバイ。

これで良かったのだ。ソラに、あんな酷い思いをさせた自分が、化け物に思えた。

残像を取り払うように目を開く。

「うん？あ：あれ。」

ふと不思議なことに気付いた。左胸が少し変だ。この違和感を何と言葉にしたらいいのか。

内部を何かで破壊されているようだ。

どうしようもない、そのもやもやだけが無数の回線を駆け巡っている。

その時だ。

「泣いているの？」

この場所の自然の静けさに逆らう声が背後からした。

起き上がってハッと振り返る。見る、声がした方を。

「泣いてるの？」

驚いた。そこに、声の主がいる。

推定だが年は若そうで気品溢れる雰囲気を漂わせている。

彼女は小さく、透き通るほどのなんとも美しい白色をしている。

更に太陽光が反射し輝いて眩しい。

「な…泣いてなんかない…だって俺、人間じゃないし。」

とつさに答える。少しムキになっていた。

雲は、まだ止まることなく先を進んでいる。

「ふふふ。だって。」

足元に水がポツンと落ちた。自分に落ちてきた水に驚いたのだろうか草が揺れた。

なんだ？雨か？いや、空は晴れすぎている。

「うん？」

また一つまた一つポツンと落ちた。草の葉に当たって弾ける。

それが自分の目から流れ出ていたことに気付くまでそう時間はいらなかった。

気付いた。なんだ俺泣いているのか…と。

止まらないそいつをどうすればいいのか分からなかったが、

「空を見上げていればそのうち止まる。」と教えてくれた。

それが最初の出会いだった。

家に帰って面倒くさい検査をした後で生みの親に今日の出来事を話した。

彼は、不思議そうな顔はせず微笑んでいた。子供の成長を見守る親みたいだ。

「なんだよ。何が可笑しい。」

「先程、故障がないか拝見しましたね。どうやら…」その後、あいつの長い話が続いた。

半分は左耳から抜けていき覚えていない。彼は妙なことを言っていた。

そのことは鮮明に記憶している。

「無」なはずの野球ボール程の心の穴に、入るはずのない部品が住み着いている。

内部に違和感があったのは、

そのせいで俺を泣かせたのはそいつのせいなんだと話していた。

やっぱり彼は不思議そうな顔はせず微笑んでいた。

その表情を見るとこの怪異もどうでもよくなってくる。

なにもないはずの場所にどこからともなく置き去りにされただけの荷物。

「よいしょっと。」

どうもジジ臭い。発した後に悲しくなってきた。

「かつ悲しい!？」昨日の故障のせいだろうか。

新しい言葉、いや新しい何かが俺の中に確かに組み込まれているようだ。

草の海に堂々と座る。

「よいしょっと。」という言葉は、生みの親の口癖なのだ。

行くところが特にない俺は、どうやらまたこの場所に来てしまったらしい。無意識に。

草原が好きだからか。はたまた…。

「こんにちは。」

急な声に驚くがその声の主がすぐに昨日の彼女のものと気付く。なぜかほっとする。

内部が徐々に暖かくなっていく。左胸の辺りが熱を帯びている。

また故障か？ショートしたのか？そんなことどうでもいいや。

「おう。」

短いであろうか。その言葉を差し出した。

太陽の光がやけに優しく、青空は広がり余計に緑が映えてみえた。

空白のスペース

「おや。また心拾ってきましたね。」

彼は複雑な機会の中を覗き込んで言った。口元がつり上がっている。

その異変に昨日より驚かない自分がいるのだ。本当に不思議だ。

この怪異を嬉しいなどと今、思っている自分がいるのだ。

ついこの間までの俺には考えられない感情がある。

第二の部品はどうやら嬉しいを教えてくれたらしい。

次の日も、また次の日も欠けた破片を探すようになった。

所々はまっついていない虫食いパズルが完成していくのを楽しんで待っている気分だ。

心にあてはまるピースを探している。それは、一番星を見つける事よりも、

四つ葉のクローバーを見つける事よりもずっとたやすいことだった。

穴はほとんど彼女が埋めてくれた。

彼女の織り成す言動のどれもが俺の心の隙間へとストレートに投げ込まれていった。

よく森で遊ぶ事、家族の事、話を聞いているだけでたちまち心はいっぱいになっていた。

野球ボール程の心の穴はもう無くなっていた。代わりに喜怒哀楽その他のもろもろ受け取った。

俺と彼女とは、似ても似つかない生き物だ。

でも少し彼女に近づけた気がする。俺は小さく微笑んでいた。

俺と彼女の関係は不思議なもので、特別な感情がある訳でもない。

恋人どうしなんて有り得ない。かと言って、友達でも親友でもない。

どれもこの関係を収める言葉じゃどこか足りない。なんだろ、パーツみないな感じだろうか。

そこにはないといけないような。彼女はどうかだろう。

奇妙な生き物だと面白がって側に居るだけかもしれない。それでも俺は構わない。

「ねえ。ここで初めて会った時どうして泣いていたの？」

彼女はふと思いつきに浸るように言った。

「うん？どうしてって、やけに嫌な事があって…あれっ。覚えてないや。」

まただ。時々昔の記憶を忘れることがある。正確にいうとあいつが時々不要な記憶つまり、

データを消去しているらしい。だから覚えているはずもなく、初めから無かったものに等しくなる。彼女は無表情だったが、笑っているようにも見えた。

彼女はともこの草原が似合う。今日は、やけにそう思った。

オフ

「困りましたね。そろそろデータが一杯になってきました。」

彼はどうやら頭部にあるデータチップのメモリを気にしているらしい。

また何らかの記憶を消しゴムのごとく消すのだろう。

「ほう。また草むらへ遊びに行ったのですか。」

データを再生し、それまで俺が見てきた日々を覗きながら彼は言った。

彼には何も隠すことは出来ない。いつも見透かされてしまう。

「おや。この子がお前に心を教えてくれたのですか。これはこれは可愛い兎さん。
お友達ですか？」

ほらまた見透かされてしまった。

「頼む。このデータは殺さないでくれ。」

俺のほんの些細なお願いで最初のわがままだった。

ただ彼女との日々を空白にするのが心の底から怖く悲しい。

感情というのはどうも予測不可能なものだ。涙を流す。

そういった感情を持ち合わせているようだ。目から二回目になるだろう涙が溢れている。

この量の水はどこから出ているんだ。と自分でツツコミを入れたくなる程だった。

「随分と人間らしくなりましたね。」

彼は作りかけの玩具がついに完成したのか嬉しそうにしている。

「なんだよ。何が可笑しい。」

この部屋から空を見上げることが出来ないからだろうか。止まらない涙。

「分かりました。お前がそんなに言うなら…。」

彼は無表情のつもだったらしいが、悲しさが隠しきれていない。

しばらくして「ただし、多少データを消去いたしました。」と言葉を軽く添え、

脳にチップを内蔵した。

「ごめんなさい」

空耳かもしれない。彼の口から心のを聞いた気がした。

彼の頬は俺と同じように濡れている。

感情というのはどうも予測不可能なものだ。

目を閉じる。

「おやすみなさい。」

そして、電源を切られた。

苦渋の選択

「ふう。よいしょ。」

茶褐色の椅子に座りもう何度読み終えたか、ボロボロになった本を広げる。

ライの体の中を検査する度にライはわくわくして、嬉しそうな表情を見せる。

「心見つかりました。」と言うと、足をバタバタさせるのだ。そのことを思い出している。

嬉しそうなライの顔が頭から離れない。つられて嬉しくなってしまう。

その反面どうしようかと困惑する。ライがこの中の感情に気付いてしまったようだ。

ボロボロの本を閉じる。「ドンッ」分厚いその本の威力で机の上に置かれてある写真立てが少し動いた。

いつかの笑っている、私達がそこにはいた。私はある行動をとることを決意した。

写真立てを伏せる。

「困りましたね。そろそろデータが一杯になってきました。」

30分前に帰って来たライに言い放った。この言葉をきっかけに私の苦渋な選択は、

スタートを切った。

ライのデータの殆どが緑色の世界によるものだった。

データが一杯になるなんてこと本当はなかった。

次世代式ロボットは予想以上に高機能なのだから。

どうやら草原での白い兎との記憶を消して欲しくはないらしい。

ライの表情は曇った。顔の皮膚が事細かに、萎まれ目は細くなっていた。仕方ない。

今まで積み上げてきたものが自分じゃない者によって壊されてしまうのだ。

表情から見ても手に取るように分かる。私への嫌悪とどうすることもないもどかしさ。

ライの目から水の雫がすうと流れていた。

話で聞いていただけだったのでライの涙を見るのはこれが初めてだった。

不思議な光景である。

一から造り上げていった白い塊だった目の前のそいつは、人間にし

か見えない。

機械である方が疑わしい程だ。

「随分と人間らしくなりましたね。」

私は目を細め、口元をつり上げる。それが今出来る精一杯の表情だった。

心を隠すための偽りの仮面。

ライの頭の中の思い出は、私が登場する事もしばしばあるが、白いその生き物の方がずっと

多い。それと同時に家よりも草原の方がずっとずっと思い出のアルバムに

閉じ込められている。

日は沈み闇一帯に風景は奪われ窓の外からはもう光が入って来ない。

青色のカーテンを閉めて窓の外のをたった。

ライの目から流れる涙は、悔しさの結晶の固まりにも見えた。

決して弱虫な涙なのではないのだ。

「分かりました。お前がそんなに言うなら…。」

データチップをライの頭部から取り出し、

コンピューターに映し出し消したい箇所だけ消去する。

簡単な誰にでも出来るたやすいことだった。

「ゴホッオホッ。」胸が締め付けられる様に苦しい。

ただ、人間的な感情を持って、知って欲しくない。ただそれだけだ。頬にすうつと蟻が走る様なかゆみを感じる。

思わず頬を手の甲で叩いて払おうとする。手が濡れる。なんだ涙か…。

「多少データを消去しました。」

ライの頭部にチップを内蔵した。この頬を流れた涙は、

罪悪感の固まりと少量の悔恨の念だったのだろう。

「ごめんなさい。」

心で吐いた言葉が涙のごとく、無意識にも無謀にも口が動くだけの声にすらならない

溜め息で出て来た。

ライの思考は停止しているのか、座ったまま蛻の殻状態で一点を見つめている。

まるで人形の様だ。

「おやすみなさい。」

首の後ろにあるスイッチを切った。その場に倒れる様に座り込む。

私にも意識を絶つスイッチがあればいいのに。

次にスイッチを押す、ONにする時が来るのが怖い…。

朝

「おはようございます。」

良かった。今日もちゃんと意識がある。

アイツがスイッチを入れるのを忘れて、

そのまま死の状態で葬り去られるのではないかと時々、

「おやすみなさい」

の後が怖い。ちょっとアイツの顔が昨日より老けて見えるのは気のせいだろう。

「ちょっと出かけてくる。」

どうやら草原の記憶は消えていないらしい。

頭での躍動感溢れる木々がインプットされている。

「行っってらっしゃい。今日は、早く帰ってきて下さい。」

ゆっくりと歩いていく俺にアイツは、大きな声で言った。

道のりがしっかり刻まれている。目的は無いがあの場合所へ向かう。

だって秘密基地的存在なのだから。無意識にも行きたくなるものだ。

草木が包み込んで、暖かく緑がとても優しい。この場所が大好きだ。

「よいしょっ。」

また言ってしまった。草に座る。

「どうしてそんなに笑っているの？」

突然の声に驚く。そこには一匹の兎がいた。そして隣にきてちよこんと座てきた。

とてもなつつこい奴だと思った。

「どうしてって、何か嬉しいから。君もよくこの場所に？」

この場所を知ってる奴がいるなんて親近感があって嬉しい。

「フフフ。変な人。」

兎は無表情だったが少し悲しんでいる様にも見えた。

それにしても草原がとても似合っている。

「君の名前は？」

太陽の光を反射するのではなく吸収して溜込みその光を外に放出する様な、

白く美しい毛をまとっている兎に質問した。

「私の名前はアミン。」

「アミンか。初めまして。」

二秒くらいの間を開けて、アミンはまた口を開く。

「そう言えばあなたの名前もまだ知らなかったわ。教えて。」

その口調の優しさは、まるでこの辺り一面の木々の様だ。

「名前……。名前……。」

いくら考えても答えがでない。それは、どんな難問よりもずっとずっと難しかった。

「無いんだ。俺には名前が……。」

初めっから無いものだから答えが有るはずもない。アミンが少し軽蔑したのではないかと

思った。恐る恐る顔を見るが、その表情はとても穏やかなものだったので安心した。

名前が無いことは当たり前な事だと思っていた。名前がなくなっただけ困ることも全くなく、

その意味さえも気付かないでいた。それから30分後、家に帰った。

「お帰りなさい。お誕生日おめでとうございます。」

ちょうど1年前と同じように、飾りもご馳走も並んでいる。

1年はこんなにも速いものだとは思ってもよらなかった。

それまでの記憶が全くないからだ。そんなことどうでもよかった。

どうせ考えても答えが出せない問題だったから。

「2才の誕生日おめでとうございます。今年は急だったのでプレゼントを

準備出来ませんでした。ごめんなさい。何か欲しいものはありますか。

今度買ってあげますよ。」

昨日までの俺はいや、さっきまでの俺は欲しいものなんてなかった。だが今は、ある。

「うーん。……名前が欲しい。」

どんな高価な宝石よりも、玩具よりも、お金よりも今一番欲しかった。

「名前ですか…。」

彼は、床を見つめて溜め息を吐くように呟いた。

それから、しばらく沈黙の2文字が2人を包んだ。

「お前の名前無かったですね。そうですね。……ライ。お前の名前。今日からライです。」

そう読んでもいいですか？」

彼は、プレゼントを恐る恐る俺に差し出した。

「ライ……？。ライ。うん。俺、今日からライ。」

嬉しかった。心の底から、名前をつけてもらったことが。端から見れば、

たいしたことじゃないだろうけど。そして彼は、「星を見てきます。」と

家の外の暗闇へと行ってしまった。名前……。そう言えば俺も知らなかったや、アイツの名前。

彼にはとても感謝している。俺を造ってくれたり世話してくれたり。でも、彼との生活はとても居心地が悪かった。どこか引かかるモヤモヤしたものがあった。

友達でも、親子でも、兄弟でもない。他人と紙一重な家族。彼の部屋へ入った。

ノートにのnameの所にでも、書いてかるかもしれない。

重大な任務の様に思えるが、俺を動かしているのはただ彼の名前を

知りたいという、

一握りの興味だった。

彼の部屋は、別の空間で初めてみるものばかりだった。茶褐色の椅子に近づき机の上の、

ノートはなかったので本を手取る。ぶ厚いボロボロの本。何度めくられて、きたのだろう。

だが名前なか有るはずもなく、本そのものだった。

本を戻したその隣り側に写真立てが伏せられている。

写真立てをもとの様に立て直してその中の写真を見る……。

俺を動かしているのは、一握りの興味…。

11月12日

「カチッ。」

私の人差し指がライのスイッチをONにした。目がゆっくりと開く。私と同じ瞳の色が現れた。

「おはようございます。」

私は、今日までライをずっと目覚めさせる事が出来なでいた。

ライの記憶を消してしまったあの日から…。

起きて1時間もたたないうちに、ライは家を飛び出して行った。

「行ってらっしゃい。今日は早く帰ってきて下さい。」

ゆっくりと歩いて行くライを見て安心してわりと冷静に言葉を発することが出来た。

このままずっと永眠させておこうとも思ったが今日は特別な日だったから意を

決してスイッチを押したのだ。家を出て庭へ向かう。私はいつも街へ出てそこで、

花を売って生活費を補っている。ユリの花が主だ。

15年前に亡くなった妻がとても好きな花だった。

他にもパンジーなど色々売っている。しかし、今日は休みにしようと思う。

今日は、ライの2回目の誕生日。そして、ライの命日でもあったからだ。

花を摘んで石碑に備え手を合わせる。今日で8回目になる。私の息子ライのお墓だった。

それは、ライが死んだのだという事実を象徴している様で、あまり好きじゃない石。

だが、この石碑がなければ天国にいるライとの繋がりが

消えてしまいそうな気がしてならなかった。だから、大事なものでもあった。

そして、妻との繋がりもそこにはあると、心に馳せたメッセージも届けてくれるだろうと、

信じていた。花に囲まれた石碑から私をいつまでも見守っていてくれればいいと願った。

いや、あっちで2人幸せであることを何より願った。妻は子供を生んですぐに他界した。

悲しかった。だけど、その子がいれば頑張れた。それが、ライだった。

居てくれるだけで、ただそれだけで幸せだった。

しかし、その幸せにも終わりがきてしまった。火事によってライの命は絶たれてしまった。

何者かによる放火が原因だったらしい。それから、街から森の中へ引っ越した。

涙も枯れ果てて、生きる意味さえも、奪われてしまった。悲しみも、悔しさも、

後悔の気持ちも生まれ出てきた。だけど、1番に思ったことは心な
んてなければ良かった、

ということだった。こんな気持ちを映し出してしまう心、

感情が初めっからなければ良かった。悲しむこともないのに…。

そして、忘れもしないあの玩具が完成した日。その日も11月12
日だった。

その前日、天国にいるライに誕生日プレゼントを買ってやろうと、

街へ出て行ったのを覚えている。出来上がったそのロボットが、幼
い頃の私に似ていた。

いや、ライにそっくりだったのだ。生き返ったのかとも、

これは夢なんじゃないかとも思った…。枯れ果てた涙も、生きる意
味も溢れてきた。

そろそろ家へ戻って、今日の準備をすることにする。家中を「誕生日」で飾る。

それから、何時間かが経った後、ギギギギとドアが合図した。

思ったよりも早くライが帰ってきた。ライの顔を見た途端、パーティー会場設営で

すっかり準備するのを忘れていたプレゼントのことを思い出し、すまなく思った。

「お帰りなさい。お誕生日おめでとうございます。」

それから、プレゼントに何が欲しいのかと尋ねた。ライの答えは、

思いもよらない以外なものだった。…名前。彼はライなのだが、ライではいいのだ。

容姿はライそのものなのだが…。私は果たして彼を言葉としてライと呼んでいいのだろうか

と疑問に思った。

「…ライ。お前の名前は今日からライです。そう呼んでもいいですか?」

ライは、嬉しそう笑った。久しぶりに笑顔を見た気がする。この部

屋にいる人間より、

ずっと動く柔軟で素直な表情だと思った。不安一杯で渡したプレゼントをこころも喜んで

くれるのなそれは、喜びに変わった。そして、星空の向こう側にいる2人にこのことを

報告しなければ、と思い星空の下の石碑へと向かった。

外は少し肌寒く、早くも冬を思わせた。

”今日あのライにそっくりなアイツにお前と同じ名前をプレゼントしましたよ”

心の中で響いた声は2人の元へ届いているのだろうか。

11月の秋の星空にどうか、幸せがずっと続きますようにと願った。

最終点

木製の作りで花が彫刻されている写真立てを、ゆっくりと立て直す。部屋の中は、

静かで異様な空気が漂っている。俺の手により写真が起き上がって現れる。その時の瞬間を、

姿を、閉じ込めて表情も色も時空を超えて一枚の映像としてそれは写し出されていた。

そこには、2人の人物が写っていたのだ。俺ともう1人の2人。

その人物の顔はよく見たことのある奴の面影があった。

アイツ顔に違いない。緑の瞳、栗色の髪の色。彼の若い頃の姿、容姿だと見て分かった。

2人とも幸せそうに笑っていた。こうして見ると隣り合った2人の笑顔は、とても似ていた。

でもこの写真を見て疑問が横切った。訳が分からない。こんな写真、写した覚えがなかった。

だから、そこに写っている自分是不自然なのだ。じゃあ、そこに写っている奴は誰なんだ？

疑問が頭の中でいったりきたりしている。もしかして…が沢山よぎっていく。

もとのように写真立てを伏せる。これは本来、伏せてあるべきものだった。

少し立ちすくんだ後、彼の部屋を後にする。そしてしばらくして、

ドアの外から寒そうに両手を擦って彼が帰って来た。俺を見るなり、

「ライ。そろそろ眠りなさい。」

と言った。寒そうに両手を擦りながら。

ライ、今日から俺はライだった。馴れないので不思議な感じがする。

時計の針は9時を指している。起き続けていたら電力を消費するの
で体に悪いのだ。

「1つお願いがあるんだけど…。明日も、明後日も俺をちゃんと起
こしてくれないか。」

電源入れてくれよな。」

不安だった。俺には明日が無い気がして…。言わなければならない
言葉…な気がした。

彼は、テーブルに置かれている皿を片付けていながら、

「大丈夫ですよ。ちゃんと起こしますよ。」

と、笑って言った。とても穏やかに。その表情には、一切嘘など含

まれていない様に。

「おやすみなさい。」

また、ちゃんと彼は俺をおはようございますと迎えてくれた。

それが、果たして誕生日の次の日なのかは、分からなかった。

だが、意識がある。それだけでも十分だと思った。

それから、アミンの所へ行き自分の名前を教えた。彼女が俺の名前を覚えて、

呼んでくれたらいいと思った。

あの草原が好きな理由はもう一つある。あの場所だけ季節が止まっている所だ。

秋だろうと冬だろうと、ずっとその場所だけ時間が止まった様に茂って、

緑一帯のままなのだ。だから、今でもまるで夏のような涼しげな風が草木を撫でている。

それから、幾つもの日々を送った。その日々のどれも彼はきちんと

約束を守ってくれているのか、過ごさせてくれた。

だが俺はまだ、彼の名前も誕生日も何一つ分からなかった。

だからこれから少しずつ教えてもらおうと思う。

出発点

そして、また11月12日がやってきた。

3度目のライの誕生日。それはまた、9回目のライの命日がやってきた事を知らせる。

昨年と同じようにプレゼントに何が欲しいのかと尋ねた。

そして返っててきたライの答えは唐突で、また意外なものだった。

「家族が欲しい。あんたの呼び方、名前、分からないし：お父さんって呼んでもいいか？」

ライの欲しいものは毎回私を驚かせる。

ライは、恥ずかしそうな表情を見せたが、それがすぐに満面の笑みに変わった。

その目の前で私は目を丸くし、それがすぐにライとは真逆な表情に変わっていた。

私は全くその気はないのだがそいつは、蓋を押し上げ当たり前の様に姿を現しやがた。

静かに流れ落ちる涙に訳なんて聞かなくても分かっていた。

私のありのままの感情を心に住んでいる住人達がただ示し姿を見せただけなのだから。

それらをまめるかのように、一滴だけが静かに流れ頬を伝った。

もう聞けないと思っていた”お父さん”と呼ぶ声が懐かしくて優しく胸を締め付ける。

もうすっかりライはロボットから人間へ変わっていた。ただ人間と少し違うのは、

データを消去出来ることと、ON、OFFがあることだけ。ただそれだけ。

「はい……。私でよければ家族にでもなりますよ。」

ライはただ一言”良かった”と言った。

その表情、その言葉を一生忘れたくないと思わせた。

そして、ライにも忘れて欲しくないと思った。

この日をきっかけに私はきっと、ライのメモリー、

モニターを見る事も消去する事も出来なくなっているだろう。

今まで邪魔で、よそに行って欲しいと思っていたこの中の心も居ても悪くないと思った。

そして、いつもの日々が始まる。私は庭へ行くことにしよう。

今日は、雲がなく快晴の空が広がっている。

手にした錆たジョウロが太陽の光で反射して眩しい。

そろそろ新しいジョウロに買えかえよう。

今日は、夕ご飯時にライに、私の息子の話をしてやろうと思った。

出発点（後書き）

ここまでたどり着くことが出来て良かったです。
ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1364b/>

心に吹く風

2010年11月27日15時43分発行